

(第7号様式の2)

事業報告書

(※必要に応じて枠を広げてご記入ください。)

1 事業名	なはユース自治大学 ～ 自治会を新たなキャンパスに ～			
2 事業期間	令和6年 5月 ～ 令和7年 2月			
3 事業内容	具体的な内容（いつどこで何を実施したか等） ○ <u>なはユース自治大学 座学 @沖縄大学</u> ・ 5月10日 那覇市まちづくり協働推進課、DX推進室 座学（助成金対象期間外） ・ 5月15日 松島自治会、古島自治会 西平会長 座学 ・ 5月24日 銘苅新都心自治会 前原会長 座学 ・ 5月31日 真地団地自治会 前田会長 座学 ・ 6月 7日 小禄泉原自治会 我如古会長 座学 ・ 6月28日 石嶺ハイツ自治会 末吉会長 座学 ○ <u>なはユース自治大学 フィールドワーク @各自治会</u> ・ 6月21日 真地団地自治会 「百金食堂」 ・ 7月 5日 銘苅新都心自治会 「銘苅歴史所、地域資源めぐり」 ・ 7月11日 石嶺ハイツ自治会 「地域見守り隊」 ・ 7月20日 松島自治会・古島自治会 「地域イベント参加」 ・ 7月26日 小禄泉原自治会 「地域課題、地域魅力現地まわり」 ○ <u>なはユース自治大学 そのほか @沖縄大学</u> ・ 8月 2日 前期振り返り ・ 1月24日 発表資料まとめ ・ 2月 9日 「大学生発表、シンポジウム、全体研修会」開催			
4 達成目標と達成度	達成目標（事業計画書と連携させる）	目標数値	実績値	達成度（%）

1. 学生が地域の魅力や課題を知り、そこへの企画立案、企画実施、政策提言などを行う。リサーチ地域対象として、那覇市自治会5つの支部からそれぞれ一つの自治会を選出し講話とフィールドワークを行う。 2. 自治会へ向けたアクションプランの最終発表と連動した公開シンポジウムを開催する。満足度を高める為、公開シンポジウムでは、公民館、議会、行政等をゲストに迎え、より学びを深める内容とする。 3. シンポジウム、全体研修会終了後、自治会長へアンケートを行い、次年度のブラッシュアップの参考資料とする。 4. 那覇市自治会長会連合会で発行している、会報紙に事業の内容を掲載、那覇市の自治会長へ広くユース自治大学の内容を共有する。また会報紙を利用し、毎月の各支部の定例会にて、話し合いを行う。 5. 自治会長、一般市民に向けた報告書を作成し、広く事業の内容を知ってもらい。次へのステップへと繋げる。	1. 5つの地域でフィールドワーク 2. 公開シンポジウムを1回開催。参加者へアンケート、満足度5段階中4以上8割 3. 全体研修会の1回開催、那覇市149自治会へのアンケート実施 4. 自治連会報なのは2回発行(9月、3月) 5. ユース自治大学報告書1冊作成(那覇市HP掲載)	1. 5つの地域で行うことができた 2. 公開シンポジウムを開催、アンケート満足度4以上は10割達成。 3. 全体研修会が2月だった為、事業期間内に間に合わなかった。 4. 1回発行済、2回目も発行予定 5. 作成済HP掲載済	① 100% ② 100% ③ 0% ④ 100% ⑤ 100%
--	---	--	---

	結果に至る理由、気づき、検証等 ・「なはユース自治大学」は、令和6年度の「なは市民活動支援事業」に採択された事業で、那覇市自治会長会連合会と沖縄大学島袋ゼミ、那覇市まちづくり協働推進課の三者が連携・協働して運営する初めての試みであった。 事業の背景として、地域自治会の必要性は若者から高齢者まで全世代を通して感じているものの、現状は自治会組織の高齢化と加入率の低下が著しい状況にあり、このため各自治会においては、次世代を担う若者（ユース）の声を受け止めながら若者が参加しやすい地域自治会のあり方や環境づくりが求められていた。 一方、沖縄大学においても長期ビジョンに掲げている“地域がキャンパス、地域のキャンパス～沖縄大学は「知」と「人」の交流拠点となります”の実現にあたって、若者世代が自治会や地域について学び、地域社会に貢献できる人材の育成が求められていた。 また、市行政でも、地域住民自らが地域づくりに参画し、自分ごととして他の団体等とも連携しながら地域課題解決に取り組んでいける社会を目指していることから、市民協働による地域自治の推進が強く求められている状況にあった。 その三者の想いが「なはユース自治大学」の事業につながった。事業の実施にあたっては達成目標・目標数値を設定した。この目標数値の達成状況がそのまま事業の評価となる。 1つ目は5支部からそれぞれ一つの自治会を選出して学生への「講話」と「フィールドワーク」を実施することである。これは大学・行政側のガイダンスを含めて4月から7月にかけて行った。学生が講話と実体験を通して地域の魅力や課題に気づくだけでなく、地域の強みを伸ばし弱みを改善するための提案が取りまとめられたことは大きな成果であった。 2つ目は公開シンポジウムの開催である。自治会長、学生、公民館長、担当課長が登壇したシンポジウムでは、学生がまとめた5つの地域自治会の現状と学生提案を受けて、島袋教授のコーディネートのもと若者が参加しやすい環境づくりと継続していくための方策が深掘りされた。 3つ目は自治会長会連合会の全体研修会である。学生発表とシンポジウムを踏まえ、引き続き自治会長と学生を交えての全体研修会（グループワークセッション）を行った。沖縄大学の学生に加えて沖縄国際大学Uniの学生やまちづくり協働推進課職員、社協職員も加わり意見交換した。9グループ全てがまとめの発表を行うことで各グループワークの内容を共有することができた。
--	--

	4つめがシンポジウムとワークショップを受けての参加者アンケートである。“満足度 5 段階中 4 以上が 8 割”を目指したアンケートの結果は、43 人の回答者のほぼ全員が「とても良かった」、「良かった」と答えた。この結果が今回の「なはユース自治大学」の大成功を物語っている。自治会長会連合会と沖縄大学、那覇市の三者の当初のねらいは達成されたといえる。 課題としては自治会長の参加者とアンケートの回答者が予定よりも少なかったこと、報告書作成までの時間が短かったことなどがあげられよう。 最後に、本事業を通して得た多くのヒントを各自治会長が持ち帰り、時代を見据えた取り組みの可能性を広げ、今後とも安全で楽しく住みよい地域づくりに取り組まれることを願う。また、参画した学生においては今回の体験を活かし、地域社会に貢献できる人材として引き続きご活躍されることを期待したい。
--	---

5 事業の成果	事業を実施したことで得られた結果 ・対象者に及ぼした影響 ○沖縄大学生：「若年層が地域にどう位置づけられているのかを知ってもらい、それにより自己肯定力が高まり、社会へ出る際の力にして欲しい」 という目標に対して、地域の現状と課題、魅力を伝える事ができた。那覇市だけでも様々な地域の色（課題、魅力）があることを知っていただき、色々な視点が芽生えたと考える。また全体研修会内での自治会長との意見交換の中で、若者が地域にとってどれほど求められているか、が伝える事ができ、自己肯定力を高める事に繋がったと考える。 ○自治会長：「多様な年齢層の受け皿になるための構想力向上、実践力の実装など、環境と意識向上に繋がりたい」 という目標に対して、フィールドワークを受け入れた自治会は、上記の目標を達成できたと考える。更に、他の自治会長は若者との意見交換の場から、自治会長が考えている若者の自治会参加と、若者のイメージする自治会、とのギャップを体感できた事は、上記の意識向上へ繋がる大きな学びになった。 ・連携機関、協力者に及ぼした影響 ○連携機関：「大学生のプランによって、様々な団体（民生委員、包括支援センター、那覇市社会福祉協議会、企業など）との連携が予想され、新しい協働の形が生まれることでの相乗効果。」 という目標に対して、ファシリテーターに那覇市社会福祉協議会より2名、オブザーバーに沖縄県中小企業家同友会から1名、シンポジウム登壇者として那覇市繁多川公民館より1名参加があった。それぞれから本事業に対する可能性と期待の言葉をいただいた。次年度は一緒に連携していく予定だ。 ○行政：「行政の多様な領域（福祉、まちづくり、防災、DX）と自治会が今回の事業で繋がることで、昨今希薄になりつつある、自治会と行政の関係を強化する。」 という目標に対して、今回10回以上重ねた、運営委員会にまちづくり協働推進課が参加。自治会長と行政のコミュニケーションが格段に増え、自治会との多くの会話が生まれ、他の連携事業にも良い波及を及ぼしている。 ○メディア：「積極的にマスメディア（新聞、TV、市民の友）を活
---------	---

	用する。特に市民の友との連携は重要だと考えていて、次年度以降も継続した発信体制へと繋げ、市民が自治への関心が高まるきっかけになりうる」 という目標に対して、今回はシンポジウムに NHK 沖縄、琉球新報、沖縄タイムス、OTV が取材に関心を示していたが、浦添市長選挙と重なり、あいにく取材に繋がらなかった。が、沖縄タイムスが興味を持っており、日程を変えて取材の打診があった。 ・地域、コミュニティに及ぼした影響 ○「自治について興味を持っていただき、自ずから地域に参画する人が増え、自分ごととして地域課題について考える人を増やしたい」 という目標に対して、フィールドワークを実施した際、大学生が日頃若者が少ない自治会の行事に参加する事で、地域にとっても明るい影響を与える事ができた。そこから、自治会が色々な事に取り組んでいることを地域の人たちに伝える事ができたので、地域に興味を持ち参加する人が少ないが増えたてくると考える。
6 次年度以降の展開	(ビジョンを見据えたうえで次年度以降に予定している展開) 今年度、若者からの意見を検討し、具体的に自治会がアクションすることが重要だ。 特に多くあった SNS の取り組みは、大学や関係機関と連携してできないかなど検討したい。 他にも沖縄大学との座学、フィールドワークの自治会枠を増加、那覇市との協働事業としての在り方、なども検討する必要がある、今回協力として参加いただいた、那覇市社会福祉協議会、沖縄県中小企業家同友会、那覇市繫多川公民館などへの運営委員会参加の検討など、運営組織の在り方も考えていく必要がある。

7 実施した事業 全体への自己 評価とその理 由	①自己評価（5段階評価）				
	当てはまるところに○をつけてください。				
	とても 良かった	良 か っ た	ま あ ま あ 良 か っ た	少 し 良 か っ た	全 く 良 く な か っ た
	5	4	3	2	1
	1 課題設定は良かったか				
	2 解決策として良い手法だったか				
	3 自団体の実施体制は良かったか				
	4 他団体との協働体制は良かったか				
	5 対象者への周知は良かったか				
	②上記の結果となった理由について 1. 自治会の課題（若者の参加）、沖縄大学のビジョン（地域がキャンパス、地域のキャンパス）とマッチした事業だった 2. 大学生からの提案、シンポジウムでの深堀、全体研修会でのグループディスカッションでの意見交換から解決策のヒントが掴めた 3. 自治会、大学、那覇市との3者で協働運営できたのはそれぞれの目標を推進する上で良い体制だった 4. 那覇市社会福祉協議会、沖縄県中小企業家同友会、沖縄国際大学 Uni からの参加協力により、意見の幅が広がった 5. 自治会長の参加が少なく、大きな反省点になった				

8 市への要望・ 欲しい支援等	なは市民活動支援事業に係る下記の項目に対して (①事業説明会 ②個別相談 ③募集期間 ④広報支援 ⑤オープンデータ 等) 特になし
--------------------------------	---